

# JIE

JOURNAL OF INCLUSIVE EDUCATION  
PRINTED 2023.0830 ONLINE ISSN: 2189-9185  
PUBLISHED BY ASIAN SOCIETY OF HUMAN SERVICES



AUGUST  
2023  
12

MAMIKO OTA  
[20211104]

ASIAN SOCIETY OF HUMAN SERVICES

ORIGINAL ARTICLE

芸術活動を用いたワークショップが障害者就  
労継続支援 B 型利用者に与える影響  
—二元配置共分散分析とインタビューによる検討—

The Influence of Workshops Using Art Activities on Users of  
Type B Continuous Employment Support for Persons with  
Disabilities; A Study Using Two-Way Analysis of Covariance  
and Text Mining

謝 雪こう<sup>1)</sup> 彭子 濃<sup>2)</sup>

Setsuko SHA

Zixuan PENG

1) 九州大学大学院芸術工学府芸術工学専攻

Kyushu University Graduate School of Design, Faculty of Design, Department of Design

<Key-words>

芸術活動を用いたワークショップ, 障害者芸術, 障害者余暇支援, EAPO 尺度  
workshops using art activities, art for people with disabilities, leisure support for  
people with disabilities, EAPO scale

direnjie3322@hotmail.com (謝 雪こう)

Journal of Inclusive Education, 2023, 12:1-15. © 2023 Asian Society of Human Services

ABSTRACT

障害者は芸術活動の参加を通して、コミュニケーションスキルの向上、生活満足度の向上等様々な先行研究で報告されたが、量的研究で障害者の変化を捉えた報告は見当たらなかった。そのため、本研究は芸術活動を用いたワークショップに参加した就労継続支援 B 型所属障害者の変化と、その変化に対するワークショップの影響について、その性質や程度について分析し、解明することを目的とした。本研究の結果、ワークショップに参加した場合、非参加の場合と比較して Well-Being の点数が上がる可能性があると考えられた。一方、質的分析の結果では、「ワークショップ」が「好き」、「人」と「一緒に」何かを作りたい、「綺麗」で「簡単」なものを作りたい、いつも来ているから「人」を「知る」ことができた等、ワークショップに対する満足とこれからも参加したいという期待が見られた。そのため、本研究は量的研究と質的研究両方からワークショップへの参加が障害者就労継続支援 B 型の利用者の Well-Being 向上に積極的な影響を与えたという方向性で他の施設や利用者に広げていく価値があると思われる。

Received  
30 March, 2023

Revised  
18 July, 2023

Accepted  
8 August, 2023

Published  
30 August, 2023

© 2023 Asian Society of Human Services Online ISSN: 2189-9185

This is an Open Access article distributed under the terms of the Creative Commons Attribution NonCommercial-NoDerivs licence (<https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/>), which permits non-commercial reproduction and distribution of the work, in any medium, provided the original work is not altered or transformed in any way, and that the work properly cited.

## I. はじめに

障害者の芸術活動は現在に至るまで、主に作品そのものの芸術的価値や評価を追求する芸術分野の活動、治療効果を追求する医療分野のセラピー活動(アートセラピーや各種療法等)、福祉分野における日常的な余暇活動などによる芸術活動、またこれら芸術、医療、福祉の枠組みにおける潮流に対して批判を提起したディスアビリティ・アートの主に4つの分野で数多く検討されてきた<sup>19)</sup>。

日本では、障害者の芸術活動は当初、福祉施設で行われた余暇支援から発展したため、福祉との関連が特に強い。障害のある芸術家の作品は芸術作品としても注目されたが<sup>19)</sup>、余暇支援としての芸術ワークショップは障害者の日々の満足と創造性向上、コミュニケーションスキル支援などの点で大きく評価されてきた。例えば、コミュニティ・アートなど誰でも参加できる地域の活動を通して、障害の有無を問わず、共同的な価値観を作ることや<sup>19)</sup>、芸術インプロワークショップで参加者の自主性、積極性を引き出すことができる<sup>8)</sup>等の効果が挙げられている。また、90年代後半から障害者の造形活動が障害にまつわる社会の価値観、すなわち、障害と健常、正常と異常等の価値基準について新たな視点を提供する可能性を持っていることが多くの研究で言及され、社会福祉分野ではNPOや民間団体による推進も行われた<sup>18)</sup>。また、国の政策支援として、平成26年から厚生労働省により障害者文化芸術活動支援事業が実施され、全国35都道府県(2021年現在)に障害者芸術文化活動支援センターが設立され、障害者の芸術創作、芸術活動に対して支援がなされるようになった。そのため、多くの福祉施設は、日常作業とともに、利用者の余暇支援として芸術系のワークショップ・リクリエーションを行うようになった。

国内の先行研究を探ったところ、社会福祉の観点から余暇支援とみなして行われた障害者芸術活動に関する報告は少なく、多くは質的研究のみが行われてきた。その中では、芸術活動が障害者に与える影響が詳しく包括的に記述されてきた。例えば、ダンスのワークショップでは、自己の身体でできることや感じられることを押し広げ、他者との協働、やりとりにおいて異なる身体の使い方があること、異なる交通の仕方があることをその場に集うものに伝えることができるとされている<sup>12)</sup>。また、さまざまなワークショップや芸術活動を通して、障害者一人一人の能力の発揮、仲間や地域の人等との交流を通じた対人関係技能の向上や役割活動の獲得も図ることができると指摘されている<sup>1)</sup>。それだけではなく、芸術活動を通して、障害者の「だれの真似をするのではなく、自分の想像力から動きが出る」というような想像力と創造力が引き出されてきた<sup>11)</sup>という報告も挙げられてきた。しかし、量的研究については、アンケート調査の記述統計や芸術活動の参加者等のデータのみであって、芸術活動の評価として量的研究はあまり用いられてこなかった。

では、海外の研究の状況はどうであろうか。海外では日本国内と違い、混合研究法がよく使われている。混合研究法とは、質的研究と量的研究の両者を相互に補完し組み合わせる研究方法であり、質的研究と量的研究の両者の視点を合わせた研究結果を導出できることで、偏りやバイアスが少なく、かつより深い理解や知見を得られる特徴を持っている<sup>4)</sup>。海外の研究は質的分析と同時に量的分析も行い、心理尺度で得点の分析をするとともに、質的データでエビデンスを強めていく傾向がみられている。例えば、Vogelpoelは混合研究アプローチを用いて芸術活動に参加した障害者の満足度について探ったところ、プログラムが開始したときに大多数の参加者は生活の質および個人的な幸福に関して不満が多かったが、終了後

はほとんどの参加者に自信の向上、コミュニケーション能力向上、自尊心、メンタルヘルスの向上が見られたという結果が述べられていた(WEMWBS 尺度得点が 41 から 47 へ増加し、低ウェルビーイングの人が 5 人から 3 人へ減少、高ウェルビーイングの人が 1 人から 3 人へ増加した)<sup>20)</sup>。その研究では、①半構造化インタビュー②累積的な定性分析ツール③観察スケール④ケーススタディ等の活動を行いながら多角的に対象者の変化を捉えていた。また、中国の障害者施設における知的障害者による芸術活動の効果に関する研究も、量的研究で層別ランダム化比較試験を用いながら、質的研究で利用者の日常生活を観察する観察シートを分析し、実験的なプロジェクトを通して、参加者の幸福感が有意に上昇したと証明している<sup>10)</sup>。そのほかに、Wilson は、信頼と心理指標(GAD-7)を使用し、Zinc Arts ArtZone プログラムを通じて障害を持っている参加者の自信とモチベーションが増し、参加者同士、参加者とスタッフ、参加者とグループの関係性が強化されたと証明した<sup>22)</sup>。さらに、Van は、WEMWBS 尺度を用いて様々な障害を持っている者が芸術活動のワークショップに参加後、彼らの満足度が有意に上昇したと証明できた。以上述べたように、海外の研究は量的研究や混合研究を多用されていると見られた<sup>21)</sup>。

このように日本と海外の研究では、見出される結論が結果的にほぼ同じになる場合もあるが、質的研究を中心した日本の研究と違い、海外の研究は Well-Being、気分、情緒の変化を測るために量的研究を取り入れている傾向が見られる。海外では量的に大まかな流れを把握し、質的に個々の特徴を捉え、また量的研究の至らないところを補強する混合研究法というような手法が用いられているにもかかわらず、これらの議論が国内で十分に紹介されていないという現状がある。国内では現在、障害者における芸術活動の重要性に対する認識は醸成されつつあるが、芸術活動への参加によって障害者がどう変化しているかについて量的な評価は見当たらない。そのため、福祉施設における芸術活動を用いたワークショップの持つ意味を外部に伝え、福祉と芸術のつながりを深くさせるためには、福祉施設における芸術活動を用いたワークショップが障害者に与える影響を量的に表し、ワークショップの特徴と参加した者がワークショップに対して抱く意識や感情をテキストマイニングで捉えていくという視点が必要と思われる。

そのため、本研究は芸術活動を用いたワークショップに参加した就労継続支援 B 型所属障害者の変化と、その変化に対するワークショップの影響について、その性質や程度について分析し、解明することを目的とした。

## II. 研究方法

### 1. 調査対象者

研究協力者は大阪府の B 会社に所属している 3 ヶ所の就労継続支援 B 型事業所の利用者計 33 名であった。内訳は、男性 30 名、女性 3 名で、年齢は 20 代 1 名、30 代 4 名、40 代 8 名、50 代 11 名、60 代 8 名、80 代 1 名であった。障害種別としては、精神障害のある者が 21 名、精神障害かつ身体障害のある者が 11 名、知的障害のある者が 1 名であった。

B 会社では 1 年間にわたって月 2 回(2019 年 8 月～2020 年 8 月まで計 24 回)、就労支援継続支援 B 型事業所のカフェエリアで、ものづくりのワークショップが行われていた。ワークショップに参加した者は 23 名、非参加者は 10 名いた。参加や非参加は本人の意思決定を尊重した上で、本人の希望に従っていた。非参加者は在宅勤務をしていたか、休憩エリアで見

学したり、めいめいに過ごしていた。ワークショップの講師とプランデザインの担当は、非常勤支援員として働いていた筆者で、毎回その日に出勤したスタッフが進行補佐を担当していた。ワークショップの内容は以下の表で示す通りである(表 1)。

表 1 ワークショップの内容

時間	ワークショップの内容
2018年8月	トリックアート①②、始まりの会
2018年9月	うちわ作り、砂絵アート
2018年10月	キャンドルホルダー作り、スクラッチアート
2018年11月	ハーバリウム、キーホルダー作り①
2018年12月	クリスマスリースリース作り、プレスレット
2019年1月	ビンゴ大会、しめ縄作り
2019年2月	バレンタインカード作り、光る瓶の間接照明作り
2019年3月	UVレジン作り①②(アクセサリ)
2019年4月	キーホルダー作り②、タイルコースト作り
2019年5月	写真フレーム作り、カラーサンドの盆栽作り
2019年6月	油絵マグネット、写真フレーム作り
2019年7月	UVレジン作り①②(キーホルダー)
2019年8月	塗り絵、締の会

なお、本研究で行われた「芸術活動を用いたワークショップ」の内容は主に作業療法領域で用いる活動「余暇・創作活動(絵画、音楽、園芸、陶芸、書道、写真、茶道、はり絵、モザイク、革細工、籐細工、編み物、囲碁、将棋、各種ゲーム、川柳や俳句等)」(「作業療法ガイドライン 2018 一般社団法人作業療法士協会」と似通っている。その結果は作業療法分野で行われた研究と同じく、ワークショップ(セッション)を通して、参加者の満足度、Well-Being 点数や社会参加の状況に良好な変化が見られ<sup>14)15)</sup>、ネガティブな感情の低下、活気の上昇といった気分の改善と近かった。

しかしながら、本研究は作業療法の領域ではなく、芸術活動を用いた対人支援を目指し、就労継続支援事業所独自(専門療法士に依存せず)で利用者の Well-Being を向上できるワークショップが実施されるように探ってきたものである。そのため、以下の点を本研究の新規性と考えている。

- ・開催施設を特定した: 2018年「障害者による文化芸術活動の推進に関する法律」が制定された。福祉就労の利用者について、工賃向上等物理的・量的な側面として福祉のあり方が強調されてきた一方、精神面の重要性も重視されるようになった。これからは、制度的、社会的に共有される芸術文化の視点を踏まえた福祉実践の新たな位置づけが重要である<sup>13)</sup>。就労継続支援の利用者は、精神科やデイケアを退院して障害や体調に合わせて自分のペースで職業訓練や軽作業を行う方が多い。そのため職業訓練のかたわら、余暇の支援として福祉現場で行われてきた芸術文化活動は、「はじめに」で述べたように参加者の気持ち転換、コミュニケーション促進等効果があるため、福祉就労施設で推奨する価値があると思われる。

- ・開催者に制限をかけない: 開催者は施設職員支援員であるため、作業療法士の人手不足や利用者支援員間のコミュニケーションの促進、緊張感解消につながると期待できる。

・芸術制作活動を中心とする：本研究で行われたワークショップはあくまで芸術活動(作業療法具体例の「余暇・創作活動」に当てはまる)を中心としており、身体機能を改善するリハビリテーションを実施しない。

つまり、本研究における芸術活動を用いたワークショップは作業療法と時期や特徴が違っているが、就労継続支援施設利用者を対象とし、リハビリや治療を目的とせずに、利用者の社会性と趣味の獲得、向上にむけて芸術と福祉のつながりを深めることが期待できる。

## 2. データ収集方法と分析方法

### 1) 二元配置共分散分析

ワークショップが行われた期間のうち4ヶ月に1回(2019年8月、2019年12月、2020年4月、2020年8月)、利用者の状況を把握し、EAPO尺度の得点を比較するために、ポジティブ作業等価評価(Equating Assessment of Positive Occupation. 以下EAPOと称する)を用いて、自記入式質問紙によってワークショップに参加した者と非参加者のWell-Being(病気でないとか、弱っていないということではなく、肉体的にも、精神的にも、そして社会的にも、すべてが満たされた状態)を測定した。

EAPO尺度は精神障害から様々な障害のある者のWell-Beingを促進する、仕事、レジャー、遊び、セルフケア、社会的交流など日々の生活を構成している活動の介入効果を一般化した値で比較することができる尺度である。EAPO尺度のカットオフ値は43点であり、合計得点が43点以上の場合、Well-Beingを得られている状態で、43点以下である場合は、抑うつ状態に陥っている可能性があるとして示されている。EAPO尺度は精神障害者や身体障害等様々な障害を抱えている者を対象として開発され、評価結果を一般化した値で比較することができ、評価と介入をシームレスに繋ぐことができるため、Well-Being向上に根ざした実践の介入効果を評価するために使用されてきた(野口 2019)。野口によれば、これまでのEAPOを活用した実践報告は、一事例の活動や社会参加に良好な変化が認められ、幸福の促進に寄与しているが、今後は集団に対するEAPO尺度を用いた支援プログラムの構築が求められると述べられている。このような背景から、本研究はEAPO尺度を評価指標として採用した。

統計分析は、二元配置共分散分析を行った。その中で、共分散分析では、ワークショップの参加の有無および評価時期間のEAPO尺度得点を比較した。

EAPO尺度による測定は、ワークショップの初回と2回目、3回目、最終回にそれぞれ測定した。各時点で参加者10名、非参加者23名から全員の回答を回収した、以下の表2、表3は参加者と非参加者の属性を示した。

表 2 参加者詳細

ID	1回目	2回目	3回目	4回目	性別 (男性 1, 女性 0)	障害種別(中で身体障害 7 等級あり、 精神障害 3 等級ある)	年齢(歳代)	出席率 (~%台)
1	40	44	50	49		1 身体障害 2 級	40	90
2	54	50	49	52		1 精神障害 2 級	40	90
3	53	45	53	47		1 精神障害 2 級	80	100
4	34	32	36	60		1 精神障害 2 級	50	100
5	41	37	43	45		1 精神障害 2 級、身体障害 2 級	60	100
6	48	41	47	40		1 精神障害 2 級	40	100
7	38	51	52	41		1 精神障害 2 級	50	100
8	25	35	36	36		1 精神障害 2 級	50	90
9	45	60	59	36		1 精神障害 2 級、身体障害 3 級	50	80
10	45	60	22	30		1 精神障害 2 級	50	80
11	38	40	38	30		1 精神障害 2 級	30	70
12	15	51	35	23		1 精神障害 2 級	30	100
13	49	50	56	52		1 精神障害 2 級	40	90
14	37	37	49	49		1 精神障害 2 級、身体障害 3 級	50	100
15	40	51	41	45		1 精神障害 2 級	50	90
16	43	41	48	50		1 精神障害 2 級、身体障害 3 級	60	80
17	58	56	48	48		0 精神障害 2 級、身体障害 3 級	60	100
18	31	51	50	50		1 精神障害 2 級	50	70
19	42	58	43	33		1 精神障害 2 級、身体障害 3 級	60	70
20	42	52	44	36		1 精神障害 2 級、身体障害 3 級	30	70
21	35	43	45	40		1 精神障害 2 級	40	80
22	40	59	35	33		1 精神障害 2 級	50	70
23	26	31	33	30		1 精神障害 2 級、身体障害 2 級	50	100

表 3 非参加者詳細

ID	1回目	2回目	3回目	4回目	性別 (男 1, 女 0)	障害種別	年齢(歳代)	出勤率 (~%台)
1	57	54	50	54		1 精神障害も身体障害も 2 級	40	90
2	49	41	41	40		1 精神障害 2 級	50	90
3	42	33	33	33		1 精神障害も身体障害も 2 級	60	100
4	33	54	33	32		1 精神障害 2 級	20	70
5	53	33	48	30		1 精神障害 2 級	40	80
6	33	38	33	30		1 精神障害 2 級	60	90
7	45	34	35	15		1 精神障害 2 級	50	90
8	46	34	37	33		0 精神障害 2 級	40	70
9	27	23	25	23		1 知的障害 B2(4 等級あり)	30	100
10	56	50	53	47		0 精神障害も身体障害も 2 級	60	100

参加群と非参加群間における性別、年代、障害の有無、障害の程度に関して、1 回目得点の比較にあたっては、カテゴリ変数にはカイ 2 乗検定または Fisher の直接法を、連続変数にはデータの正規性を確認した上で Mann-Whitney の U 検定または対応のない t 検定を使用した。統計学的解析には SPSSver.25.0 を使用し、有意水準は 5%とした。比較にあたって

は年齢、性別、障害種別(身体障害・精神障害・知的障害)、障害程度、出席率を共変量とし、参加の有無および評価時期を要因とした。交互作用が認められた場合には、各要因の水準毎に単純主効果を検討した。なお事後検定には Bonferroni 法を用い、有意水準は 5%とした。

## 2) テキストマイニング

本研究ではワークショップの参加者の中でインタビューに同意した者にインタビューを実施した。実施のタイミングは、全てのワークショップが終わった 2020 年 8 月末日、個室で一人に 15～75 分のインタビューを行い、大量の文字データを得ることができた。しかし、これらの多数のテキストデータは、対象者の参加したワークショップが異なる上に、記述されている内容も、各回のワークショップについての具体的要望から極めて個人的な感想に至るまで、非常に多岐にわたっている。それ故、客観的に全体の傾向を把握しようとすることは極めて困難である。また、要約しようにも分析者の恣意的・主観的な解釈となってしまう危険性からは逃れ難い。そこで今回の分析では、こうした危険性を可能な限り回避すべく、「計量テキスト分析」または「テキストマイニング」と呼ばれる手法を用いることとした。

計量テキスト分析のソフトを設計した樋口は「従来、テキスト型データを計量的に分析する方法には、Dictionary-based アプローチ(分析者の作成したコーディング基準にそって言葉や文書を分類する方法)と Correlational アプローチ(多変量解析によって言葉や文書を分類するアプローチ)のいずれかが用いられることが多かった<sup>9)</sup>。しかし、前者には、分析者の理論や問題意識を自由に操作化し、データの様々な側面に自由に焦点を絞ることができるという利点がある一方で、都合の良いコーディング規則ばかりが作成・利用されてしまう危険性がある。他方、後者には、分析者の持つ理論や問題意識の影響を極力受けない形でデータを要約・提示できるという利点がある一方で、多変量解析に大きく依存しているため、理論や問題意識を自由に操作化し追究する上では限界がある」と述べている。そこで、樋口は、これらの 2 つのアプローチを互いに補い合う形で統合することを提案した上で、日本語テキスト型データの分析に適したシステムとして KH Coder を作製・公開している。KH Coder は、語の選択にあたり恣意性を与える恐れのある「手作業」を廃し、多変量解析によってデータ全体を要約・提示することと、コーディング規則を公開するという手順を踏むこととによって、操作化における自由と客観性の両立を可能にしている<sup>7)</sup>。本研究においては、この KH Coder を用い、操作の詳細を明示・公開した上で多変量解析によるデータの要約・提示を行うことで、客観性を確保しつつ参加者の自由記述の全体的な傾向を捉えることを試みた。

参加者のうち許可が取れた 6 名にインタビューを行った。性別は男性が 4 名、女性が 2 名であった。年齢は、50 代 3 名、60 代 2 名、80 代 1 名である。全員精神障害があり、加えて、身体障害もある者は 4 名であった。

インタビューは芸術活動を用いたワークショップに対する満足の度合いやワークショップの内容や道具、開催の方法、指導の方法、場所の配置などについて半構造化インタビューを実施した。インタビューのデータは本人の許可を得て録音した。データはその後文字起こしを行った。

以下の表 4 は事業所利用者のフェイスシートに即して、取材対象者の具体的属性をまとめたものである。



表4 インタビュー対象者詳細

事例番号	1	2	3	4	5	6
年齢	50代	50代	50代	60代	60代	80代
診断名	身体障害 精神障害	身体障害 精神障害	知的障害 精神障害	身体障害 精神障害	身体障害 精神障害	精神障害
面談時間	35分	25分	23分	12分	15分	37分
利用年数	約1年	約1年	約2年	約2年	約1.5年	約8ヶ月
暮らし形態	家族と同居	一人暮らし	一人暮らし	一人暮らし	一人暮らし	一人暮らし
利用時間(WS以外)	毎日9～15時	毎日9～15時	毎日9～15時	毎日13～15時	2回/週、9～13時	毎日9～13時

インタビューの内容には以下の質問項目を設けた。質問項目は、ワークショップに対する本人の感想とそれぞれの要望を詳しく把握し、ワークショップを実施する上でのガイドとなるようなカテゴリ関連図を作ることを意図して作成した。

- ①今までのワークショップはいかがでしょうか。
- ②難しかったワークショップはありましたか、どうしたら楽しくできるのでしょうか？
- ③楽しかったワークショップはありましたか、どこが楽しかったですか？
- ④ワークショップの参加でどんな楽しい経験ができましたか。
- ⑤一年間のワークショップの中で、不足なところと、満足したところがありましたら教えてください。
- ⑥これからやってみたいワークショップはありますか。

### 3. 実施期間

2019年8月～2020年8月

### 4. 倫理的配慮

研究協力者には、文書および口頭により研究目的、調査方法、データの扱い(個人情報等)について説明するとともに、研究協力は自由で、断っても不利益はないことを説明した。また、施設管理者の同意も口頭および文書で得た。本研究は九州大学大学院芸術工学研究院「人を対象とする実験研究の実施指針」に関する倫理審査委員会の審査承認を得た(承認番号 361)。

### 5. 分析に対する質の確保

本研究では、信頼性の確保のため、複数の評価者(障害者心理分野の研究者、就労継続支援サービス管理責任者、相談支援員、職業指導員)のチェックを受けた。メンバーのチェックで複数の研究対象者に調査内容または分析内容を確認の上、助言をもらい、事業所スタッフ会議の中でもスタッフ数人から助言をもらった。また、障害者アート活動、音楽教育と質的分析に精通している共著者が研究方法、結果、考察を含め、全体にわたり点検を行なった。これらにより、分析内容の信頼性と妥当性が保持されるよう努めた。

### Ⅲ. 結果

#### 1. 二元配置共分散分析の結果

参加群と非参加群間における性別、年代、障害の有無、障害の程度を1回目得点で比較した結果は以下の表に示した通りであり、すべての変数について参加群・非参加群間での有意差は認められなかった(表5)。

表5 群間の差の比較

	参加群(n=23)			不参加群(n=10)			使用した検定	有意確率
	平均値	標準偏差	中央値	平均値	標準偏差	中央値		
年代	48.26	11.54	50.00	45.00	13.54	45.00	Mann-Whitney の U 検定	0.686
性別	男性	22	-	-	8	-	Fisher の直接法	0.212
	女性	1	-	-	2	-		
身体障害の有無	あり	9	-	-	3	-	Fisher の直接法	0.463
	なし	14	-	-	7	-		
精神障害の有無	あり	22	-	-	9	-	Fisher の直接法	0.521
	なし	1	-	-	1	-		
知的障害の有無	あり	0	-	-	1	-	Fisher の直接法	0.303
	なし	23	-	-	9	-		
身体障害の程度	1.04	1.36	0.00	0.60	0.97	0.00	Mann-Whitney の U 検定	0.451
精神障害の程度	1.91	0.42	2.00	1.80	0.63	2.00	Mann-Whitney の U 検定	0.802
知的障害の程度	0.00	0.00	0.00	0.20	0.63	0.00	Mann-Whitney の U 検定	0.658
得点 (1 回目)	39.96	9.79	40.00	44.10	10.32	45.50	対応のない t 検定	0.280

#### 1) 二元配置共分散分析

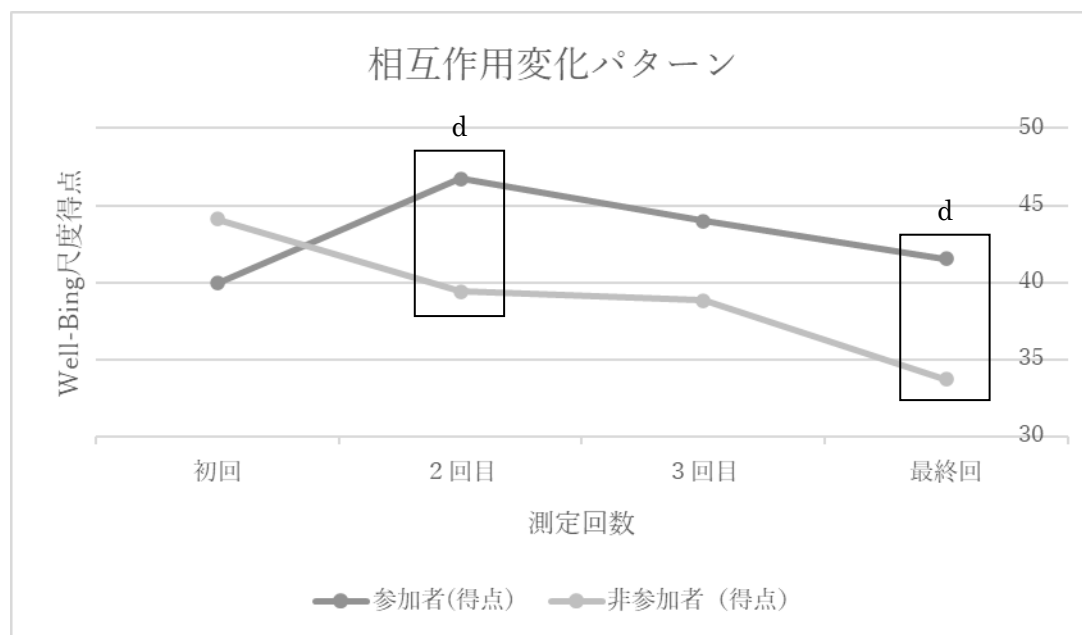
分析の結果は表5のように、評価時期と参加の有無による交互作用が認められた( $F(3, 78)=545.218, p=.032$ )。参加群における EAPO 尺度の得点では初回と2回目で有意差が認められ( $p=.033$ )、不参加群における EAPO 尺度得点ではワークショップ初回と3回目( $p=.011$ )、初回と最終回( $p=.040$ )で有意差が認められた(表6)。また、不参加群・参加群間における各評価時期の EAPO 尺度の得点の比較では、変化パターン図(図1)で示したように、ワークショップ2回目( $p=.047$ )とワークショップ最終回( $p=.045$ )で有意差が認められた。

表6 EAPO 尺度得点の比較

		EAPO 尺度得点			
	N	1 回目	2 回目	3 回目	4 回目
		Mean (SD)	Mean (SD)	Mean (SD)	Mean (SD)
参加群	23	39.96a (9.79)	46.74a (8.96)	44.00 (8.58)	41.52 (9.28)
不参加群	10	44.10bc (10.32)	39.40 (10.28)	38.80b (8.98)	33.70c (11.18)

群と時期の交互作用検定  $F=3.097, p=.032$

群内での時点間比較: a, b, c, 同文字間有意差あり (Bonferroin による調整済み)



群と時期の交互作用検定  $F=3.097, p=.032$   
群間での時点間比較: d 同文字間有意差あり (Bonferroin による調整済み)

図1 相互作用変化パターン

## 2. テキストマイニングの結果

本研究は、KH Coder の「共起ネットワーク分析」を用い、インタビューのデータそれぞれの中で、出現パターンの似通った語(すなわち共起の程度が強い語) どうしを線で結んだネットワークを描いた(図 2)。なお、分析にあたっては、出現数による語の取捨選択の最小出現数を 5 語に設定し、描画する共起関係の絞り込みにおいては描画数を 60 に設定した。

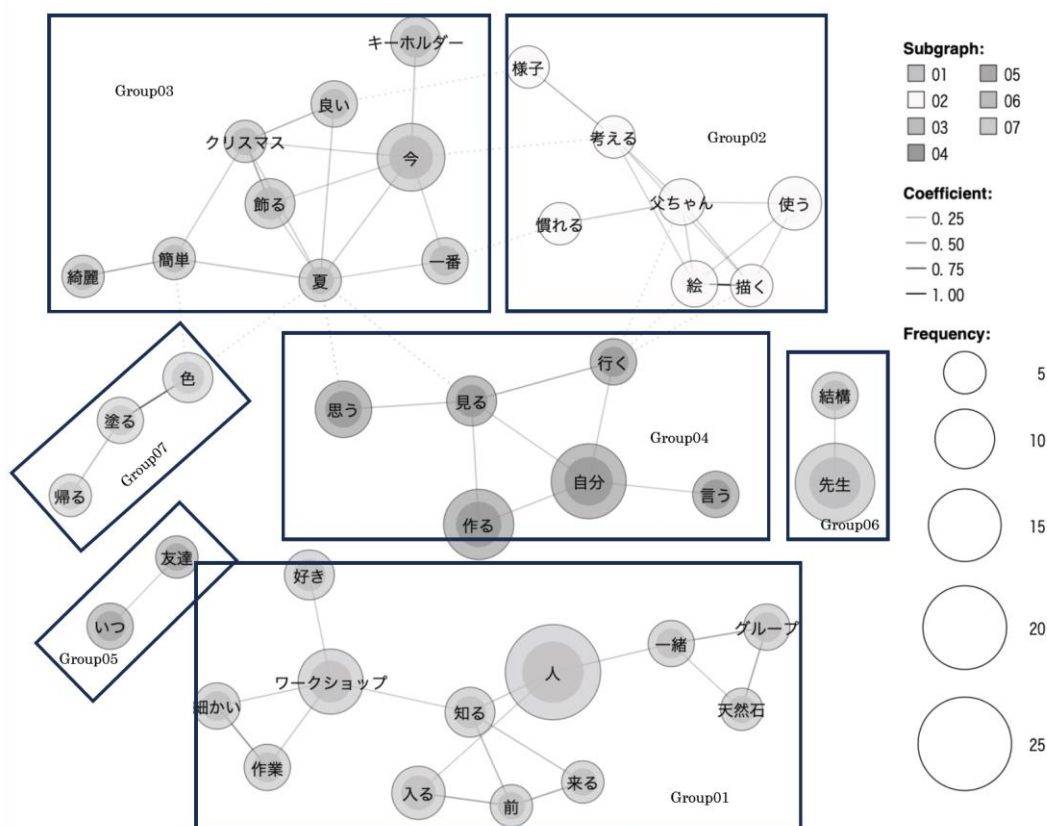


図2 共起関係図

強い共起関係ほど太い線で、出現数の多い語ほど大きい円で描画されている。また、語 (node)の色分けは「媒介中心性」(それぞれの語がネットワーク構造の中でどの程度中心的な役割を果たしているかを示す)によるものであり、白から色の濃いものの順に中心性が高くなることを示す<sup>9)</sup>。以下では、図2に示した語の共起関係をもとに、筆者が特徴的な記述のまとまりと判断したものを項目として立て、参加者の実際の記述を鍵括弧内に原文のまま抜粋しつつ(恣意的・主観的な解釈との批判は免れないが)要約する。

本研究では、中心性に基づき、テキストマイニングにより抽出した語を7つのグループに分類した。最も中心的な位置を占めるのはグループ04の「見る」「思う」「作る」「自分」等の、色彩が最も濃い語であり、その次に「ワークショップ」「好き」「細かい」「作業」「知る」「人」「一緒」グループ05の中の語が高い中心性を示していた。インタビューでは、すべての利用者がワークショップに対する満足感を示した。その満足感の内容を見ると、「自分」の力で何かを「作る」ことや、「細かい」「作業」ができたこと、「知る」「人」がいたり、「人」を「知る」ことができたりすることで、物作りを通じての楽しみだけでなく、コミュニケーションも豊かになったことが分かり、その上、満足の内容はどちらも「自分」か「人」を中心となっており、人間関係が楽みの主な内容になっていると共起関係図から読み取れた。

### 1) 今までのワークショップについて

今までのワークショップについては、主にグループ03に反映されている。例えば、見た

目は「綺麗」で「簡単」に作れるところや、「クリスマス」の飾りや「キーホルダー」など「飾る」ことができるものが良いという記述も多く見受けられた。グループ 03 の中で多くの話と繋がっている「今」は「今の時期に(取材時は夏)合うワークショップ」を意味しており、インタビューでは「今に合わせたワークショップが良い」や「その時の時期に合わせたものが良い」などの声が聞こえ、時期に合わせたワークショップに参加者が満足していると考えられる。

## 2) よかったところと不足なところ

図 2 各グループの中からワークショップのさまざまなワークショップの内容が反映されている、今回の取材の中で、利用者の好き嫌いはそれぞれで、結果も多種多様になっている。そのため、共起関係図から直接によかったところと不足なところを読み取ることは難しい。しかし、インタビュー内容と照らし合わせて読み取ると、例えば、「自分」で物を「作る」、あるいは自分から活動に「行く」ことがよかったことや、「自分」で良い「雰囲気」の作品を「作る」ことで達成感を感じたことや、他の人が何かを作っているところを「見る」ことも面白かったという意見も見られた。また、共起関係図右下にグループ 01 で「一緒に」「天然石」のアクセサリーを作るワークショップも人気が出ていたことがわかった。しかし、同じグループの中で一定数以上の参加者が「細かい」「作業」のほうに集中できて「好き」だと示していることに対して、一部の参加者は細かい作業に対して否定な態度を示していた。それは、就労継続支援施設 B 型の参加者の中で、高齢層で目が見えにくいことまたは身体障害の影響で細かい作業を行うことに困難なのかと考えられる。

## 3) これからやってみたいワークショップ

これからやってみたいワークショップについて尋ねると、グループ 02 で示したように、多くの者は「今」のままで「一番」「良い」と答えている。また 1) で述べたようにいままでの「夏」の季節感を感じられる、季節に合ったワークショップ等が良いと意見が出た。またグループ 06 で示したように、講師やスタッフが指導する際に、参加者に多く体験してもらうこと、参加者が自分で「考える」こと、ワークショップに「慣れて」もらうなどの意見も寄せられた。そのほかに、自分で「考え」た「絵」を「描く」(グループ 02) こと等簡単なワークショップを希望している者もいた。

## IV. 考察

本研究は芸術活動を用いたワークショップに参加した障害者の変化と、その変化に対するワークショップの影響について、その性質や程度について分析し解明した。量的調査の結果として評価時期と参加の有無による交互作用を認め、各評価時期の EAPO 尺度の得点の比較では、ワークショップ最終回で参加群と非参加群に有意差が認められたことから、本研究の結果の限りでは、ワークショップに参加する場合は、参加しない場合と比較して Well-Being の点数が上がる可能性があると考えられる。また、参加者と非参加者の Well-Being 点数の変化パターンから、途中で自粛令発生など、生活パターンの急激な変化を余儀なくされるといったさまざまな影響を受けたと考えられ、両者の Well-Being 点数が下がっていたが、その状況下でも依然として参加者の Well-Being は非参加者より点数が高かった。そのため、ワーク

ショップへの継続的な参加が障害者就労継続支援 B 型の利用者の Well-Being 向上に積極的な影響を与えたという方向性で他の施設や利用者に向けていく価値があると思われる Ho は芸術活動やワークショップを月に 1 回～数回まで定期的に行い、毎回違う内容で取り組んでいた事例を挙げるなど<sup>10)</sup>、継続的な活動についての重要性は先行研究でも指摘されてきた。本研究はこれらの知見を踏まえ、EAPO 尺度得点を指標として、芸術活動を用いた継続的なワークショップが就労継続支援 B 型事業所の利用者の Well-Being の点数に良い影響を与えることを示唆するものとなった。

さらに、アンケートでは、参加者の自由記述から自動的に語を取り出し、頻出語を確認した上で、それらの語の共起ネットワークを描き、全体的な傾向の可視化を試みた。その結果、どのような内容のワークショップも、「人」を中心としており、「自分」の感覚、「人」とのつながりが重要と参加者に思われていることを見受けられた。また、参加者たちは現在のワークショップに対して概して満足しているものの、一部の人々からはより簡易なワークショップへの希望が示されたことが分かった。ワークショップへの参加により、人々との繋がりが深まり、コミュニケーションが豊かになったこと、そして季節に応じたワークショップが良い体験となったことから、ワークショップは参加者の Well-Being、つまり幸福感を向上させたと考えられる。ただし、参加者の中には、「細かい作業」が好きな人もいれば、「細かい作業」が苦手な人もいるという事実が見受けられた。それゆえに、今後のワークショップ計画においては、参加者の障害特性を考慮し、それぞれの能力に応じた活動を提供すると共に、参加者のコミュニケーション能力と生活の充実度を高めることができるよう、例えば「キーホルダー作り」や「塗り絵」といった身近で記念となる作品づくりにも取り組む方向性を示すことが重要であると示唆された。

本研究の限界として、主に量的データのサンプルサイズが小さく、参加者男女の人数の偏りが大きかった。また、研究協力機関の人数の制限によりランダム選出ができなかったため、今回の結果はあくまで協力機関に限って有効であったと言える。また、質的分析では、質問項目の構成と対象者の数が少ないため、現段階のデータでは芸術活動が障害者に与える変化に対する分析は抽象的であるため、これからは対象者の数を増やし、インタビューの質問項目を追加していくか、Well-Being 点数が明らかに上昇した者に対して追加インタビューして、その者の変化をケーススタディとして分析していく必要が感じられる。今後はさらに男女、年齢や障害種別等交絡因子による影響を軽減するため、多くの施設に協力を仰ぎ、RCT(ランダム化比較試験)を実施してさらに検証していく必要があると思われる。

## 謝辞

本研究に当たって、多忙な業務の時間を割いて筆者の調査にご協力いただいた研究協力者の皆様、そして文章の構成、研究デザイン等多くご教示くださった筆者の指導教員である長津結一郎氏に心から感謝を申し上げる。

## 文献

- 1) 石川隆志・佐藤裕子・石川佐智子・塚本文子・村田千鶴子・石川郁恵. 『秋田大学医学部保健学科紀要』「地域活動支援センター事業の活動報告-障害者が地域で普通に暮らすことを目指して-」. 2009, (1)-17, 53-58.
- 2) 尾崎孝良. 診療補助行為に関する法的整理. 日本医師会総合政策研究機構, 2016, N, 358.
- 3) 黒田美穂. 医行為と医行為でないものの違いを理解する. 真・介護キャリア, 2015, 11(3), 60-64.
- 4) 抱井尚子・成田慶一. 『混合研究法への誘い—質的・量的研究を統合する新しい実践研究アプローチ』 2016,5-13.
- 5) 戈木クレイグヒル滋子. グラウンデッド・セオリー・アプローチ概論. *KEIOSFCJOURNAL*, 2014, 14(1), 30-43.
- 6) 荻宿俊文・佐伯胖・高木光太郎. ワークショップと学び 3 まなびほぐしのデザイン. 2019, 東京大学出版.
- 7) 越中康治・高田淑子・木下英俊・安藤明伸・高橋潔・田幡憲一 et al. 宮城教育大学目標・評価室: 平成 25 年度学部授業の点検・評価報告書. 宮城教育大学情報処理センター研究紀要 COMMUE, 2014, 22, 67-74.
- 8) 葉山大地・ヒュース由美・上田知子. 発達障害を持つ当事者を対象としたインプロ・ワークショップの効果に関する探索的検討. 中央学院大学人間・自然論叢, 2016, 42, 3-38.
- 9) 樋口耕一. テキスト型データの計量的分析—2 つのアプローチの峻別と統合—理論と方法. 2020, 19 (1), 101-115.
- 10) Ho R, Chan TH, Pui CK & Ted CT. Effects of Expressive Arts-Based Interventions on Adults With Intellectual Disabilities: A Stratified Randomized Controlled Trial. *Frontiers in Psychology*, 2020,11(6), 1-9.
- 11) 稲田奈緒美. 日本におけるコミュニティダンスの導入と展開. 桜美林論考・人文研究 2011, 11, 1-19.
- 12) 小泉朝未. ダンスワークショップで実現する表現の考察. メタフュシカ, 2017, 48, 89-102.
- 13) 趙晤衍. 福祉現場におけるアートプログラムの持つ新たな意義と課題に関する研究 - 福祉現場における出張陶芸プログラムの実践検証をもとに -. 人文社会科学研究所年報, 2017, 15, 37-50.
- 14) 野口卓也・京極真. 精神障害者に対する幸福を促進する作業の等化評価における信頼性と妥当性の検証. 日本臨床作業療法研究, 2019, 4, 62-69.
- 15) 野口卓也・京極真. 精神障害におけるポジティブ作業に根ざした実践のプログラム開発とその適用方法の予備的検討. 作業療法, 2019, 38(1), 54-63.
- 16) 野口卓也・京極真. ポジティブ作業評価. 2021.
- 17) 島先京一. アール・ブリュット論に向けて. 成安造形大学紀要, 2011, 2, 203-218.
- 18) 高橋健一郎. 障害者の芸術活動に関する研究の動向と課題 -共生社会形成に向けた文化資源としての視点から-. 聖徳大学研究紀要, 2019, 52, 7-14.

- 19) 田中みわ子. 芸術創造の新しいかたちを考える-障害者アートの実践をめぐって-.駿河台大学論叢, 2017, 54, 176-192
- 20) Nicholasand V & Jarrold K. Social prescription and the role of participatory arts programmes for older people with sensory impairments. *Journal of Integrated Care*. 2014, 22(2), 39-50.
- 21) Van V, Emily B & Ana M. Arts on referral interventions: A mixed-methods study investigating factors associated with differential changes in mental well-being. *Journal of Public Health (United Kingdom)*, 2015, 37(1), 143-150.
- 22) Wilson C & Sharpe D. Young people's mental health and well-being through participation in the arts: A mixed-methods service evaluation of the Zinc Arts ArtZone programme. *Journal of Applied Arts & Health*, 2017, 8(1), 39-55.





# JOURNAL OF INCLUSIVE EDUCATION

## EDITORIAL BOARD

### EDITOR-IN-CHIEF

Changwan HAN  
Shimonoseki City University

### EXECUTIVE EDITORS

Aiko KOHARA  
Shimonoseki City University

Atsushi TANAKA  
Sapporo Gakuin University

Chaeyoon CHO  
Shimonoseki City University

Eonji KIM  
Miyagi Gakuin Women's University

Haejin KWON  
University of the Ryukyus

Hideyuki OKUZUMI  
Tokyo Gakugei University

Ikuno MATSUDA  
Soongsil University

Kazuhito NOGUCHI  
Tohoku University

Keita SUZUKI  
Kochi University

Kenji WATANABE  
Kio University

Kohei MORI  
Mie University

Liting CHEN  
Meiji University

Mari UMEDA  
Miyagi Gakuin Women's University

Mika KATAOKA  
Kagoshima University

Nagako KASHIKI  
Ehime University

Naotaka WATANABE  
Shimonoseki City University

Shogo HIRATA  
Ibaraki Christian University

Takahito MASUDA  
Hirosaki University

Takashi NAKAMURA  
University of Teacher Education  
Fukuoka

Takeshi YASHIMA  
Joetsu University of Education

Tomio HOSOBUCHI  
Saitama University

Yoshifumi IKEDA  
Joetsu University of Education

### EDITORIAL STAFF

#### EDITORIAL ASSISTANTS

Haruna TERUYA University of the Ryukyus

Natsuki YANO University of the Ryukyus

as of April 1, 2023

# JOURNAL OF INCLUSIVE EDUCATION

## VOL.12 AUGUST 2023

© 2023 ASIAN SOCIETY OF HUMAN SERVICES

Presidents | KOHZUKI Masahiro & LEE, Sun Woo

Publisher | Asian Society of Human Services  
#303, Kokusaiboueki Bld.3F, 3-3-1, Buzenda-cho, Shimonoseki, Yamaguchi, 750-0018, Japan  
E-mail: ash201091@gmail.com

Production | Asian Society of Human Services  
#303, Kokusaiboueki Bld.3F, 3-3-1, Buzenda-cho, Shimonoseki, Yamaguchi, 750-0018, Japan  
E-mail: ash201091@gmail.com

## CONTENTS

### ORIGINAL ARTICLES

---

- The Influence of Workshops Using Art Activities on Users of Type B Continuous Employment Support for Persons with Disabilities; A Study Using Two-Way Analysis of Covariance and Text Mining  
Setsuko SHA, et al. 1
- Analytical Research about Infant (1-2 years old) Development Process of Language Concept and Expression Based on CRAYON BOOK  
Takashi OKADA, et al. 16
- Challenges for Career Development Support for Nurses in Non-Regular Employment Status for Childcare; Based on Interviews with Nursing Managers at Small and Medium-Sized Hospitals  
Rika WATANABE. 31
- Parents' Consciousness about Self-determination of Children with Intellectual Disability or Autism Spectrum Disorder and Factors Influencing the Parents' Consciousness  
Yuxin CHEN. 46
- The Examination of Factors Influencing the Conceptual Formation of 1-2 Years Old Children by Environment; Focusing on the Results of Data Analysis of the CRAYON BOOK and Interviews with Childcare Workers  
Kiyomi UTAGAWA, et al. 62

### REVIEW ARTICLE

---

- Nursing Care at the Time of Death including Grief Care; Review of the Literature on Perceptions of the Bereaved and Implications for Nursing Education  
Rena AYABE, et al. 80

### SHORT PAPER

---

- Current Situation and Issues Concerning Lifelong Learning in Special Needs Schools for the Physically Disabled Person; From a Survey of Special Needs School in a Local City  
Aya IMAI, et al. 91

### ACTIVITY REPORTS

---

- Educational Practice on Understanding Quantity for Early Childhood; Based on the Perspective of Number Concepts of the CRAYON BOOK  
Naomi OKADA, et al. 105
- A Practical Examination of Multi-Tiered Instruction Model in Higher Education  
Youhei MANASE. 118